

独立行政法人国立国語研究所「外来語」委員会 第3回
議事要旨

1. 日時 平成14年11月29日(金)10:00～12:00
2. 場所 国立国語研究所会議室
3. 出席者 甲斐委員長, 水谷副委員長, 中西副委員長, 相澤委員, 加藤委員, 倉島委員, 輿水委員, 小森委員, 柴田委員, 陣内委員, 関根委員, 田中委員, 鳥飼委員, 福田委員, 松岡委員

4. 会議の概要

(1) 今後の予定について

本年12月に行う言い換え発表は, これまでの検討結果を一度, 世に示して意見をいただく中間発表とし, その後, いただいた意見や開始した定着度世論調査の結果を盛り込み, より妥当性を高くしたものを平成15年4月に最終発表することとした。

(2) 検討結果の中間発表に向けての作業について

第1回言い換え対象候補約70語について, 第2回委員会後に各委員においてそれぞれ検討した内容整理を行った。

その結果, 定着度が高く言い換えるの必要性の高くないもの, 部分的な修正を行うなどして意見集約が可能なもの, 論点が多岐にわたったり, 有力な考え方が対立し議論が更に必要なもの, 意味・用法が複雑であったり言い換えるの着眼点が不明瞭であったりして, 更に詳しい調査・検討を要するもののように分類し, 次回の委員会へ向けて検討を行うこととし, 併せて言い換えるの提示方法についての大枠をまとめた。

(3) 会議での主な意見

単語主義でいくのか, 文脈主義でいくのかの問題になる。いろいろなものをたくさん出していく行き方もあるが, 焦点をしぼる行き方もある。いろいろなかたちが出てくるといことになると不揃いの印象を与える。

例えば「インパクト」は平成13年の調査で認知率が87.8%, 理解率74.7%。定着度は極めて高いが, 100%ではないということに重視すると, こういう語についてもやはり言い換えたほうがいい, あるいは公文書では使うべきではないとの意見もある。定着度が高くてもどういう手当てをするかということでは判断が分かれる。

例えば「オンライン」は, 「通信回線」という言い換え語が候補に挙がっているが, 回線自体を指すモノとしての用法と, 今つながっている状態のことをオンラインであるというような状態のことを表すことがあり, 意味的には単純でない。これをどう判断して最終形態にはめこんでいくかということでは, ただ定着度だけではない難しさも一部では伴っている。

例えば「コミュニケ」は定着度は低い, 一方で, 「声明」とか「宣言」とかという言い方で国際的な会議などの発表を示すことがある。その「声明」や「宣言」と「コミュニケ」とは発表のレベルが違う。あるいは重みが違う。そういうところを重視される人は, 「コミュニケ」というものを専門性の高い外交用語としてはそのまま使うべきとしている。

例えば「ノーマライゼーション」については適切な言い換え語がまずない。「通常化」とか「標準化」とか、いくつか出たが、積極的な意見は非常に少なく、むしろこの新しい言葉の概念をきちんと押さえることが大切で、まだ意味がきちんと押さえられていない。それから、「共生」という言い換えを支持する意見もあるが、その一方で否定する意見もある。その他に「福祉社会」「隔離廃止」というのもあるが、いまひとつ文脈にあてはめるとぴったりこない。あるいは「ノーマライゼーション」という語はもうこの語として定着をはかるべき大事な概念なので、説明をつけることでその定着をはかっていくべきか。

「ノーマライゼーション」は、これが新たな概念の導入になるのか、それとも日本にはこういう概念がすでにあるのか、そのへんの議論こそ公に提示して、大いに議論するのがいい。「共生」とは何なのか。言葉、日本語だけではなくて、そのうしろにある日本社会を改めて考えるきっかけにもなる。

例えば「インフラ」で、「社会基盤」というものが有力な言い換え候補語であるが、予備知識がない人には「社会基盤」といわれても「インフラ」が持っている意味を表すことはできない。あるいは、「交通・通信・上下水道などの」という具体的な説明を付加したうえで「社会基盤」という必要があるとの意見もある。また、「インフラ」というのは「インフラストラクチャー」という語の略語なので、その略語を使うことに抵抗感がある。そういう意見がある一方で、「インフラ」というものはもう新語として定着させる方向を目指すほうがよいとの意見もある。

例えば「ケア」はそのまま使うという積極的な意見と、使用を避けるべきだという意見とがある。意味が広くて便利だから使っていていいという意見と、反対に軽薄であいまいになるから避けたほうがいい、こういう考え方が対立している。

「ケア」になるといくつかの意味に分かれており、上にも下にもいろいろつけて使われて、さらには「マネージャー」を略した「ケアマネ」という言葉が出てきたり、非常に生産性が高い言葉でいろいろいじっていても始末におえない。しかし、日本語で置き換えられないくらい非常に貴重な言葉なのかもしれない。

マスコミが使う言葉の使い方自体にも問題があり、きちんと言うべきところをぼかすために使う場合がある。一般の人たちがあまりよく内容を把握しないまま、それでいいのではないかと考えてしまい、問題の所在があいまいになっているというケースがある。マスコミで使っているのだから、定着したと思いたくない。

いままでの外来語の扱い方では、分かる言葉・分からない言葉、理解できる・理解できない、使っている・使っていないということできている。しかし、本当に大切なことは、たとえ分からなくても、使われていなくても、日本人が生きていくことにとって非常に役に立つ言葉であれば、積極的に入れるという考え方自体をどこかで用意しておく必要がある。

みんな使っているけれども、それこそ雰囲気を楽しんだり、なんとなく使いやすいからというような使い方は排除すべきである。ただし、それを説明するものさしは簡単にはできないので、目の前の仕事としては、どれくらい使われているかという客観的な資料に基づいて、この段階まで作業を進めますということで行くのがいいのではないか。

ぜひ日本人の未来にとって役に立つ言葉はどれか。その意味では専門的な言葉で必要なものは積極的に入れる必要も起こりうる。

楽しみで外来語を使っているのをどうするか、商業外来語として、民のほうから自然と出てくるものもあり、それは基本的に規制できない。人間の表現欲求、表現の自由というのがあり、そのあたりをどの程度入れ込むか。しかし、伝わらないといけないところで伝わっていないものは言い換えるという、その判断がそれぞれの委員で違う。

一つの言葉を取り出しただけでも、こんなにばらばらな意見があるという、その事実を出すだけでも、あんまり深く考えないで使っていることに再考を促せるのではないか。

白書など行政側が使うと問題がある語、つまり、言い換えたとしても問題のある語がある。それを別の単語に近いものに言い換えてもあまり意味がない。

特殊なところで使われたものが一般化するときに混乱を起こしてくるということがたくさんあり、そういったものは第1発信、第2発信、第3発信というような格好で出す、そういう態度が必要なのではないか。

使われている日本語の文脈自体がひどいのに、言葉だけ言い換えても意味がない、そこから問題は出発していると指摘する中で、答えは明快に出す。ただし、いろんな問題があるということをおある段階で示しておかないと、苦労して最終的なものに来たというプロセスが伝わらない。

言葉狩りをやっているのではない、しかし外来語というのはこれだけの問題がある、最終的に資料を読むことによって、言葉に関する意識改革を訴えるというような姿勢を出したい。

白書を中心に考えるとすれば、国民の大半が分かることが前提と思う。その中にあいまいな言葉が使われることを批判すべきである。また、「ノーマライゼーション」とか「コラボレーション」とか、長いものは必ず切って短いものを作り、妙な格好のものができあがってくる。それを考えると、しばらく検討の対象にしておいたほうがいいかもしれない。

考え方に差があるなら、むしろそのことは積極的に出しておいたほうがいいのではないか。かくなる手続きをへてこういう結論に来たということが分かるようなやり方が無理して一つにまとめることよりはよい。

何を外部の方々が求めているかという問題がある。それに適切に出さないと効果がない。われわれが仮に専門家とすれば、専門家がいろいろ議論をしている内容というのは、第2、第3の価値でしかないかもしれない、結果的に、何ですかというのが今の社会的な要求かもしれない。従って結果的には非常に単純なほうがいい。

以 上